



工房橙と展示ギャラリーの間に立つ鈴木隆さん52歳

湘南の新窯元  
7

根府川・工房橙  
鈴木隆さん

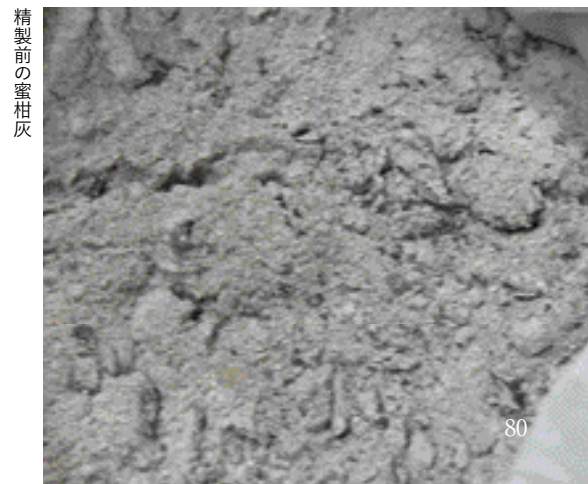
蜜柑灰と青瓷による器

出版物を見ているうちに、陶芸好きになってしまった鈴木隆さん。10年間ほど趣味で楽しんでいたが、35歳のときに会社を辞めて陶芸を本格化させた。灰釉は地元のみかんの木を燃やして作るかたわら、陶芸家を目指すきっかけとなった青瓷にも挑戦。公募展で蜜柑灰釉が受賞したり、青瓷が入選したりするなど、評価が高い。根府川の工房に展示ギャラリーを併設していると聞き、訪れた。



手作りの展示ギャラリー

① 左・中2点とも「蜜柑灰釉ぐい呑」 左が高さ5cm、径6cm 右：「蜜柑灰釉注器」高さ13.5cm、15×12.5cm／②「米色瓷茶盤」高さ8.5cm、径12cm／③「蜜柑灰釉花器」高さ9cm、径18cm／④「米色瓷花器」高さ24cm、径12cm／⑤「青瓷輪花水指」高さ12.5cm、径25cm／⑥「蜜柑灰釉香炉」高さ9.8cm、径10cm／⑦「米色瓷香炉」高さ10cm、径11.5cm／⑧「焼締鉢」高さ12cm、径14cm



精製前の蜜柑灰

PROFILE

- 1965年 小田原に生まれる
- 1991年 独学で作陶を始める
- 2000年 会社を辞め、本格的に作陶を始める
- 2001年 小田原で初個展(ギャラリー新九郎)
- 灰釉壺が陶芸財団展奨励賞
- 自宅に常設展示室を開設
- 2003年 青瓷壺が長三賞ビエンナーレ入選
- 2004年 青瓷皿が朝日現代クラフト展入選
- 青瓷壺が朝日陶芸展入選
- 2006年 自宅展示室を移設し、工房に常設ギャラリーを併設する
- 2012年 高島屋横浜店 美術工芸サロンにて個展、以降2015年他個展、グループ展などを多数開催





蜜柑灰のアク抜きは3回ほど水を取り換えてから調合する



他の窯を知らない鈴木氏は、温度調整や雰囲気調整が難しいとされる灯油窯の焼成も独自に習得した

るまで近隣から入手したさまざまな樹木の灰を試している。マツ、ヒノキ、スギ、ケヤキ、カキ、サクラ、クヌギ、クリそれに箱根の寄木細工から入手したミズキなどがそれぞれにあたるが、針葉樹はグリーンに近い焼き上がりで熔けやすく、広葉樹は針葉樹よりも色味が薄く熔けづらい。試行錯誤の結果定番として作り続けているのが稼業にしていたみかんの木で、入手しやすいうえに量的にも問題がなかった。一方鈴木氏は、濃く掛けると透き通った水色を呈する蜜柑灰釉に

憧れの米色瓷

鈴木氏は師を持たないため、蜜

合う粘土にも独自の工夫を凝らしている。使用しているのは瀬戸の精製されていない赤土粗目と信楽の白土細目で、焼くと赤土の中に含まれている鉄分が細かな斑点となって顔を出す。焼き上がりを大きく左右するのが白土で、同じように見えても白土の成分が均一ではないため、新たに購入したときはテスト焼成を見極めたうえで配分比率を調整する。

柑灰や藁灰などの灰釉と、粉引、織部、天目、青瓷、焼締、練込など、興味を持ったやきものに手当たり次第挑戦してきた。テーマは季節に応じた食器、花器それに茶器などだが、その中でもっとも情熱をもって取り組んできたのが、青瓷だ。陶芸にのめり込むきっかけとなった焼き物であり、憧れているのは1970年に窯変米色青瓷を完成させ岡部嶺男（1919-1990）。目標にしている陶芸家も数多い人気作家で、鈴木氏は「書店」でその存在を知り、陶芸を始めた2年後の93年頃からその制作に取り組んできた。素地は、信楽白土と黒土、赤土、磁土を混ぜ合わせたもので、焼成時間は20時間前後。焼成温度は釉

葉の配合によって1180℃から1250℃だが、焼成している窯は当初からの灯油窯。青磁の焼成は通常、炉内の雰囲気偏りにくいとされている電気窯やガス窯で行われることが多い。しかし、師を持たなかった鈴木氏は、そんな先達の教えを受け入れる環境にはなく、ひたすら灯油バーナーを調整する腕を磨いた。その成果は、長三賞ピエコンナーレや朝日陶芸展、朝日現代クラフト展に現れており、完成度の高い青瓷に到達しているのだ。灰釉、青瓷に加えて鈴木氏が取り組んでいるのが焼締。青瓷でも使っている黒土を主体にしており、秀でたるくる技による端正な姿が印象的な作品群だ。現在この3種が、橙窯の主力となっている。



年4回ほどの個展を地元に行っている鈴木さんは、この6月に大磯のギャラリーさざれ石で開催(左は同ギャラリーのオーナーで、窓際には蜜柑灰釉もの展示)

密柑灰による灰釉、青瓷それに米色瓷で知られる鈴木隆氏の工房橙は、東海道本線根府川駅から真鶴方面に歩いて5分ほどの根府川旧道沿いにある。紺色の工房の手前に併設された展示ギャラリーの前で待つこと数分。軽自動車で見えた鈴木氏は長髪の芥川賞を受賞したお笑い芸人似で、着ているTシャツは工房の名前と同じ「だいだい」色。さっそく取材がスタートした。

鈴木氏は1965年、工房から海岸に向かって徒歩5分ほどのところで生まれた。実家は親の代まではみかんを栽培する農家で、工房とギャラリーがある鉄骨の建物は、もともとは出荷するみかんの仮置き場。しかし、みかんの経済的生産の北限と言われる湘南みかんは、海外からの柑橘類輸入や国内の生産過剰により耕作面積や生産量が大幅に減少していった。鈴木家も例外ではなく、鈴木氏が学生の頃には小さな畑を残すだけになっていた。学校を卒業後に鈴木氏が就職し

蜜柑灰釉にたどり着く

雑誌や書籍などを参考に、どちらかと言えば趣味の範囲で陶芸に親しんでいた鈴木氏は2000年、書店勤務を辞し、本格的に陶芸家として歩むことにした。インターネットの普及により本の販売や読書形態に大きな変動が起こりつつあった時期だ。さらに確信はなかったが、陶芸を始めた当初から手



鈴木さんは中学からギターを始め、そのケースも展示台として使用



横に並べたアンティークなタンスの上には蜜柑灰釉作品を



青瓷や焼締は階段状にして展示

みかん小屋を工房に

たのが、小田原近郊に複数の支店を展開する老舗書店。仕事の合間によく読んでいたのが、専門雑誌、女性雑誌、総合雑誌、専門書などの陶芸のあらゆる記事。初めは興味本位だったが、次第に実際に陶芸がやりたくなくなり、1991年公民館で作陶していたグループに参加。見事に陶芸にはまってしま